

ファミリー・ホスピス株式会社は、ホスピス住宅や訪問看護、訪問介護事業などの運営を行っており、『終末期ケアのイノベーションと普及』を理念として掲げています。看取りの場を提供するというネガティブなものだけでなく、一人ひとりの人生の仕上げのお手伝いとして、緩和ケアの提供と自己実現を支えたい。症状マネジメントだけでなく、自己実現というプラスの価値を創造することを目指しております。ホスピス住宅は、安心して医療や介護が受けられ、かつ自宅のような環境で自由に生活できる、病院とおうちのいいところ取りと、わたしは捉えています。がん終末期や神経難病の方をお受入れし、品質の高いケアを提供しながら、最期まで安心して過ごしていただける場所で在り続けるよう、邁進しております。当社の最大の強みはケアの質の高さで、その品質を維持するため、がん看護のスペシャリスト梅田恵さん、田村恵子さんも運営や経営に参画し、専門・認定看護師も数十名現場で活躍し、専門性を活かした症状マネジメントや日常生活支援を行っています。

今回のテーマであります、実践の部分についてお話致します。

一口でいいからお刺身と日本酒を、週一回楽しんでいる難病の方は、誤嚥のリスクをしっかりと説明し理解を得ている状況で、言語聴覚士(ST: Speech-language-hearing therapist)の介入で実現しました。その都度嚥下の状態、日々の状況を看護師と ST で評価し、奥様の持ってこられるお刺身を味わっていました。

物忘れがひどくなった奥様を、心配して一度だけでも家に帰りたい方

病状は週単位、今なら帰れると病院の医師、看護師、ケアマネジャーと病状をアセスメントし退院日を決めました。自宅の中までの動線を熟考し、3人がかりで布担架を抱え、酸素のボンベは病状を看ながら看護師が抱えて移動。この一瞬のために、介護ベッドを搬入し一時間奥様と過ごすことが出来ました。

入居を決めるまで、何度も見学に来られた旦那様は、一風変わった見学をされました。確認したいのは、防犯設備やハザードマップ、設計図、非常用電源の確保など。実は旦那様は建築業で、奥様の眠るベッドを仕事をしながら見守れるよう自身の作業用机も設置されました。建築家ならではの視点で、全力で奥様を守ろうとしているのだと感じました。残された日が僅かとなると、積極的に旦那様ができるケアを、例えばマウスケアジェルの味を嫌がる奥様に、冷やしたお茶をスプレーで潤すことなどを指導しました。口が乾くたびに、旦那様がケアをされました。亡くなった後は「妻の終焉の場だから」とお花を持ってこられたり、どうしてもここを去れない気持ちを感じ取りました。ならばと、奥様の記念樹を植えることを提案しました。庭師を訪ね、奥様が大好きだったと選ばれたハナミズキは、ハウスのシンボルツリーになっています。

ホスピスケアは、その人らしさを支えるケアです。入居前の見学の時から、看護の責務である療養上の世話を通して、ACP を常に意識し看護の専門性をもって介入し継続する。これがその人らしさ・希望を支えることにつながると考えます。その実践のためには多角的なアセスメント、利用できるリソースの知識を持つこと、症状マネジメント、経験値を活かすこと、知識をアップデートすること、時には古い知識も活用すること、十分に説明し納得を得ること、コミュニケーションを密にとること、柔軟性と寛容性も大切だと考えます。